



Data

監督・武術指導：程小東（チン・シウトン）

出演：甄子丹（ドニー・イェン）／陳慧琳（ケリー・チャン）／黎明（レオン・ライ）／郭曉冬（グオ・シャオドン）／寇振海（コウ・ジェンハイ）

👁️👁️ みどころ

共に秦の始皇帝によってBC228年、BC222年に滅ぼされた趙国と燕国が対立・抗争していた時代の物語がコレ！「遺言さえしておけば、跡目争いは生じないのに」と思うのは、『天地人』における上杉家と同じだが・・・。

アクション監督として数々の作品で腕を振るう程小東（チン・シウトン）監督の手にかかれれば、本作の剣さばきと度肝を抜くアクションは圧巻！その中で魅せる、甄子丹（ドニー・イェン）、陳慧琳（ケリー・チャン）、黎明（レオン・ライ）3人の人間模様とは？

1500万ドル（約14億円）の製作費が高いか安いかはあなたの判断次第だが、香港映画の定番ともいえる95分で十分楽しめることは、私が保証したい。



■□■時代はBefore始皇帝600～400年？■□■

『ウィキペディア』によれば、中国の春秋戦国時代とは、「BC770年に周が都を洛邑（成周）へ移してから、BC221年に秦が再び中国を統一するまでの動乱の時代を言う」とされている。他方、戦国七雄とは、秦、楚、斉、燕、趙、魏、韓の七国。秦は1番西（国都は咸陽）に位置し、燕は1番東北（国都は薊）に位置し、趙は燕の南西（国都は邯鄲）に位置している。

秦の始皇帝（当時は国王政）によってまず滅ぼされたのは趙で、これがBC228年。陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『始皇帝暗殺』（98年）には鞏俐（コン・リー）演ずる趙姫が登場するが、趙滅亡の姿はこの映画に生々しく描かれている（『シネマールーム5』）

127頁参照)。趙の滅亡によって、直接秦の圧力を受けたのは燕。そこで、その状況を切り開くべく太子丹が刺客として荊軻を送ったわけだが、その様子は『始皇帝暗殺』や『HERO (英雄)』(02年)、『シネマルーム5』134頁参照)で見事に描かれている。始皇帝暗殺の企みは結果的に失敗し、燕もBC222年には滅んでしまった。

しかして、『エンプレス—運命の戦い—』が描く、趙と燕の対立抗争の時代はいつ? 周代初期に建国された燕はBC11世紀から春秋戦国時代にわたって存在したが、趙が建国されたのはBC403年。だから、両国が対立抗争関係にあったのは、BC403~BC228年までの約200年間になる。すると、この映画が描く時代は、Before始皇帝600~400年? ちなみに、『ウィキペディア』には燕の歴代君主の名前が書かれているが、本作の燕飛児という女王は書かれていない。本当に燕にはこの映画が描くような女王がいたの?

■□■なぜ明確に遺言しておかないの?■□■

張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『王妃の紋章』(06年)は3人の王子が王位継承を争っていたし、NHK大河ドラマとして放映中の『天地人』では上杉謙信死亡後の跡目を景勝と景虎が争っていた。弁護士の人に言わせれば、その原因はいずれも事前に王位継承について明確な遺言をしていなかったこと。

本作でも、趙国との戦いの中、敵の矢に胸を射抜かれ瀕死の重傷を負った国王が、側近である雪虎将軍(甄子丹/ドニー・イェン)を王位継承者とし、伝家の宝刀である飛燕剣を王女である燕飛児(陳慧琳/ケリー・チャン)に与えると、本人だけに口頭で伝えたのがその後の跡目争いの原因。王からそのように聞かされたら燕飛児が主張しても、王の甥である胡覇(郭曉冬/グオ・シャオドン)やその側近たちが納得しなかったのは当然だ。

王の葬儀の席に集まった重臣たちが一触即発状態になったのは上杉家と同じ。また、3月1日放送の第9回『謙信死す』では、萬田久子扮する妙椿尼が、謙信は「家督は景勝に」と遺言していたという一世一代のインチキ宣言によって形だけは収まったが、それと同じように、王位は将来的に燕飛児が継ぎ、彼女がそれにふさわしい実力をつけるまでは雪虎がその教育係になるという妥協案で燕国も一旦は収まった。しかし、こんな中途半端な解決策では上杉家と同じようにたちまち内紛が起こることは明らかだ。なぜ国王は明確に遺言しておかないの?

■□■槍の名手から、度肝を抜くアクションへ■□■

チャン・イーモウ監督の『HERO』(02年)で、槍の名手として秦王政の暗殺を狙いながら、李連杰(ジェット・リー)扮する無名(ウーミン)が秦王への謁見を果たすために、あえて自分の命を犠牲にした長空(チャンコン)を演じたのが甄子丹(ドニー・イェン)、『シネマ5』134頁)。そのドニー・イェンが、程小東(チン・シウトン)監督の本

作では、主役として華麗な剣さばきと度肝を抜くアクションを魅せてくれる。

呉宇森（ジョン・ウー）監督の『レッドクリフ Part I』（08年）や、李仁港（ダニエル・リー）監督の『三国志』（08年）では、蜀の五虎大将軍の1人である趙雲子龍が劉備の子、劉禪を背中に背負ったまま曹操の大軍を突破していく「ありえねー」アクションを見せつけられたが、チン・シウトン監督は本作でその延長線いやそれ以上の度肝を抜くドニー・イェンのアクションシーンをクライマックスとして用意している。胡覇の大軍とたった1人で戦う雪虎のアクションはたしかに華麗にして度肝を抜くものだが、別の言い方をすれば、それは、「そんなバカな!」「ありえねー!」と思えるもの。

しかし、チン・シウトン監督のアクションを楽しむためには、そういうつまらない常識(?)を捨て、スクリーン上で華麗に展開されるアクションにのめり込むことが大切・・・?

■□■梅蘭芳とは全く違う役でレオン・ライが■□■

チェン・カイコー監督の『花の生涯-梅蘭芳』（08年）では、青年時代の梅蘭芳を演じた余少群（ユィ・シャオチュン）に喰われた感が強い黎明（レオン・ライ）が、本作では元朔月剣（さくげつけん）の戦士ながら、今は森の中でひっそりと隠遁生活を送る段蘭泉役を演じている。本作では主役の雪虎役を演ずるドニー・イェンはアクションが売りだが、段蘭泉を演ずるレオン・ライは燕飛児との儂く淡い恋模様売り・・・?

胡覇の放った刺客に襲われた燕飛児の命を救った段蘭泉が、森の中に1人で作った宇宙ステーションのような基地も異様なら、燕と趙が争ったBC403年～BC221年に気球を飛ばすという発想も異様で、これぞチン・シウトン監督の面目躍如たるもの・・・? 趙国との戦いに勝利して、やっと燕の内憂外患を解決した燕飛児が王位を放棄してまで段蘭泉の基地に駆けつけてきたのに、そこが再び胡覇の放った刺客によって襲われる中、朔月剣の戦士であるはずの段蘭泉が意外にあっさりと命を落としてしまうのは少しガッカリ。しかし、95分という香港映画の標準時間に収めるためには、これもやむなし?

いずれにしても、梅蘭芳役とは全く違う役のレオン・ライに注目だが、ひょっとして彼のファンの楽しみは、映像よりもケリー・チャンとデュエットで歌う『随夢而飛 (FLY WITH THE DREAM)』という主題歌の方に・・・?

■□■ケリー・チャンの甲冑姿に違和感あり?なし?■□■

日本でも人気の高い香港出身の美人女優ケリー・チャンが、本作では『冷静と情熱のあいだ』（01年）、『インファナル・アフェア』（01年）（03年）のイメージを捨て、ガッチリとした甲冑に身を包み、剣と弓そして馬を操るアクションに挑戦している。『三国志』でマギー・Qが演じた曹操の孫娘曹嬰（そうえい）や、『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）でケイト・ブランシェットが演じたエリザベスI世のように、美女の凛々しい甲冑姿はカッコいいものだが、当然それには賛否両論がある。さて、あなたはケリー・チ

ヤンの甲冑姿に違和感あり？それとも、なし？

私が意外に思うと同時に感心したのは、ケリー・チャンが燕国の王女として命令を下す姿が様になっているうえ、彼女の声がよく響きわたること。女性が大きな声を出すときキンキン声になって聞き苦しいことが時々あるが、彼女にはその心配がなく、これなら全軍に下す命令も十分浸透するはず。そんな風にケリー・チャンの声がよく通るのは、2006年に行われた香港の民間テレビ局TVBの歌謡大賞で“アジア太平洋地区で最も人気のある香港人女性歌手”の栄冠に輝いた歌唱力のせい？劇中で恋をテーマとした前述のレオン・ライとのデュエット曲が流れるのは違和感があるが、さすが一流の歌手兼女優としてのキャリアを積み上げてきたケリー・チャンだと感心。

■ ■ 「江山美人」とは？ ■ ■

本作の原題は『江山美人』で、英題は『An Empress and the Warriors』、そして邦題は『エンプレス—運命の戦い—』。このように比べると、「江山美人」の由来がわからなければ、この原題は浮いてしまう。

プレスシートによれば、「江山美人」とは「中国の民間伝承として語られる物語であり、黄梅調の古典劇としても知られている」とのこと。また、少し長くなるがプレスシートをそのまま引用すれば、「黄梅調」とは「中国湖北省黄梅県などに伝わる彩茶調と呼ばれる民謡をベースとし、物語を形成。また各地方の風土色などが取り入れられ演劇となったものである。詩は七字が一節となり、台詞を歌う様に語っていくので、ある種ミュージカルともいえる。瞬間に中国で人気となり広まった黄梅調演劇は、やがて、香港映画界でも題材として映画化される。映画会社ショウ・ブラザーズの製作を筆頭に、50年代末から60年代前半まで黄梅調映画は一大ブームとなり、その代表作が63年の「梁山泊祝英台」で、当時アジア全土で記録的なヒットとなった。監督は香港映画界の巨匠で、日本でも「西太后」(84)や「火龍」(85)で知られる李翰祥(リー・ハンシャン)。その黄梅調映画の布石ともなったのが、本作品と同名で、59年に製作された「江山美人」であり、日本でも62年5月17日に東和株式会社(現・東宝東和)により公開されている」とのことだ。そして、「江山美人」の物語は、「若くして帝位についた明の聖徳帝と、身分の違う酒屋の娘との悲恋物」らしい。

そんな物語と本作は全く関連性がないのに、なぜ本作にそんな原題を？それは、香港映画界の巨匠であるリー・ハンシャン監督に対するチン・シウトン監督の思い入れ？チン・シウトン監督と徐克(ツイ・ハーク)監督の名作『チャイニーズ・ゴースト・ストーリー』(87年)は、リー・ハンシャン監督が1960年に撮った『真説チャイニーズ・ゴースト・ストーリー』のリメイクとのことだし、その他にもチン・シウトン監督とツイ・ハーク監督はリー・ハンシャン監督の作品をリメイクしているらしい。ちなみに、私が2009年3月10日に観た2007年の大ヒット作『ウォーロード／男たちの誓い』も、香港

の映画会社ショウ・ブラザースで製作された張徹（チャン・チェー）監督の代表作『ブラッド・ブラザース/刺馬』を陳可辛（ピーター・チャン）監督流にアレンジしたものだから、香港映画ではショウ・ブラザースの名前は不滅？

日本人にはわかりにくい香港映画の裏話だが、そんなところまで勉強しながら本作を観れば、「なるほど、これが香港映画か！」と納得できることが多いはずだ。

■ 1500万ドル（約14億円）は高い？安い？

ジョン・ウー監督の『レッドクリフ Part I』（08年）、『レッドクリフ Part II』（09年）の製作費は約100億円だが、これは世界進出戦略を見すえただけではじき出された製作費。しかも不足した約10億円はジョン・ウー監督自身が負担したというからすごい。それに対して、アクション監督としての活躍が目立つチン・シウトン監督が久しぶりに監督した本作は、「製作費1500万ドル（約14億円）で作られた武侠アクション超大作！」と紹介されているから、きっと14億円はすごい金額。その製作費は、巨大セットと戦闘シーンにおける多数のエキストラを含む大規模なロケ代にかかったのだろうが、問題はそれだけかけた製作費の回収ができるかどうかだ。

ちなみに、第81回アカデミー賞で作品賞、監督賞など最多8部門を受賞したダニー・ボイル監督の『スラムドッグ\$ミリオネア』の製作費は同じ1500万ドルだが、興行収入は「2009年2月22日時点で9,840万ドルに達しており1億ドル（約95億円）を超える見通し」とのことだから荒稼ぎしていることはまちがいない。また、私の大好きな韓国のキム・ギドク監督は低予算・短期間製作主義を貫いているから、大コケすることはありえない堅実な路線を歩んでいる。



『エンプレス ～運命の戦い～』発売中
価格：DVD ¥3,800（本体）+税 発売元：ポニーキャニオン、ツイン
2008 (C) United Filmmakers Organization Limited

そんな風に考えると、チン・シウトン監督がこの映画の製作費にかけた14億円は高い？
それとも、安い？

2009（平成21）年3月12日記